

次いで傳記委員丹羽鋤彦博士が銅像前に進み出て古市博士傳記奉奠の式をすまずと、來賓を代表して樞密院議長平沼棋一郎博士が颯爽たる姿勢で古市博士の人物性行を讚美したる祝辭を朗讀されて多大の感銘を與へ、東京帝大學總長、長與久郎博士は東京帝大に對する古市博士の功績を讃へられた。次いで遺族を代表して古市六三氏より挨拶があつたが、その中に

故古市博士は病床に於て近頃は種々なる人の傳記が編纂されてゐるが、萬一私の没後に於て傳記編纂の議が出たら、それは御断りして貰ひ度い、それは傳記を作られると、私一人が偉いものに書かれて、他の多數の協力した實際に仕事の爲に骨折つた人々に申譯ない事である。天下の仕事は一人の力で出来るものではない、多數の人の力であるから私達の傳記など作るに及ばない云々と申されたとの事であ

る。而して一應は遺族の方から傳記編輯を断はられたのであるが、記念事業會としては我國の工學會の爲に史實散佚しても困るから、此際是非にも編纂して置かねばならぬので、其事業を進められたとの事である。

斯くて銅像除幕式は非常に感激を以て式を閉じた尙ほ古市博士の傳記は近く出版の運びとなる由である。

(因に本號卷頭に名井博士の清吟を掲載するの榮を謝す。尙寫眞は古市男の銅像と除幕式當日の記念撮影で、銅像を中心に向つて左側中川吉造、佐野利器、八田嘉明、塚本靖、名井九介、岡田竹五郎、谷井銅三郎、松田竹太郎、堀進二の諸氏、同じく右側眞野文二、古市六三、正木直彦、丹羽鋤彦、西脇吉久、内田祥三、中村徳太郎、森井健助、平賀讓、今泉喜一郎、牧田環の諸氏)

新 刊 紹 介

蒲 孚 氏 の 砂 防 工 學

蒲氏は内務省に於て砂防工事に16年間も關係したエキスパートである。日本の如き急峻な地勢に於て治水の爲の河川改修をなすには先づ砂防を第一にやらねばならぬのであるが、それが永い間中々實現されなかつた。

今日漸く治水の根本問題の第一として砂防工事が實施せられる様になり、石川縣の手取川や富山縣の常願寺川や其他の川系にも相當大規模の砂防堰堤などが施工されてゐるが、堰堤だけで砂防の目的を達し得るものではないので、此等の設計、施工に關しては蒲氏は永い間に尊い經驗を積まれてゐる。

蒲氏は日本工人俱樂部創立當時から、公益團體の運動にも參加し、今日近衛内閣の標榜してゐる社會正義などと云ふ事は我が技術家仲間にして既に十數年前から實際運動に現はれてゐたのである。當時の革新的氣分に熾えてゐた蒲氏の砂防工事も研究的に多分の熱と力のあつた事は云ふまでもない。而して蒲氏は我國の砂防工事に終始したのである。今日氏の著書『砂防工學』の發刊を見て、まことに其人を得たるの喜びにたへない。

砂防工學の緒言に於て蒲氏は治水の目的達成の爲には國策上砂防工事の必要なる事を力説して言々火を吐くものがある、其一節に曰く『工費を8分の1に減額して、さて何んな効果が得られるであらうか、爲さざるに勝るかも知れないが、之に依つて砂防工事の効果を判断されては、砂防工事が泣くであらう』云々と自分の専門に徹底して公益工事の爲に自分を捧げた人でなくしては此言葉は出ない筈だ。本書は尙約約250頁の内容に、溪流の性質から、流域に於ける植物及施業、石礫移動の法則、砂礫の生産及流出を豫防する方法、堰堤、護岸、水制、排水路、山腹工事、砂防に關する法規、砂防工事實例等を各章別に詳説されてゐる。特に堰堤に90頁砂防工事實例には50頁を費して、實際經驗の貴さを示してゐる。附圖寫眞等も鮮明なもので、最近土木關係の好著として讀むべく見るべきものの一である。

古市公威博士を記念する爲の日本工學全書中の白眉であらう。定價2圓20錢、工業圖書株式會社發行である。